

## 〈国会事故調報告書〉

「事故対応の最前線となる中央制御室は、機能性と居住性が最も高い場所でなければならない。精神的、肉体的に過酷な環境の下、限られた人数の運転員が長時間にわたって中央制御室にとどまり、事故対応を行わなければならないためである。」

『国会事故調報告書』149 ページから抜粋

## 「国会による継続監視が必要な事項—免震重要棟の整備」

『国会事故調報告書』597 ページから抜粋

(福島)県原子力対策監を務める角山茂章会津大教育研究特別顧問は、日本原子力学会の会議で大熊町のオフサイトセンターが原発事故で機能しなかった事例を挙げ「免震重要棟がなかったら東日本は崩壊していたのではないかと」と緊急時の脆弱さを批判した。

2015年3月28日『福島民報』論説(原子力政策 この道でいいのか)から抜粋

国際原子力機関 (IAEA) レンティッホ事務総長

2016年2月24日共同通信インタビュー

「極度の自然災害に耐え、過酷事故であっても、緊急対応する適切な要員や設備を展開できる強固な拠点を建設することは重要だ。」「福島第一原発では免震重要棟が地震や津波で破壊されず、事故に対応する施設となった。事故から学んだ大きな教訓の一つだ。」

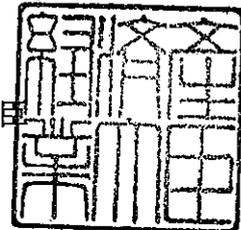
2016年2月26日『東京新聞』

経 済 産 業 省

20140716資第23号  
平成26年8月11日

原子力規制委員会 殿

経済産業大臣



九州電力株式会社川内原子力発電所の発電用原子炉の設置変更許可（1号及び2号発電用原子炉施設の変更）に関する意見の聴取について（回答）

平成26年7月16日付け原規規発第1407163号により意見照会のあった標記の件については、許可することに異存はない。

経済産業省としては、九州電力株式会社川内原子力発電所について、新規規制基準に適合すると認められた場合、平成26年4月11日に閣議決定された「エネルギー基本計画」の方針に従って、再稼働を進め、その際、立地自治体等関係者の理解と協力を得るよう取り組むこととしており、貴委員会や関係府省とともに、適切に対応していく所存である。

# 福良昌敏・元福島第一原発ユニット所長

福島第一原発の事故当時、1〜4号機を統括するユニット所長として吉田所長を補佐した東電の福良昌敏(ふくらのあきとし)元原子力・立地本部副本部長(58)が取材に応じた。

——地震発生時は。

事務本館2階の執務机で仕事をしていた。長く強く揺れて天井の化粧板がぼろぼろ落ち、ほこりで真っ白になった。揺れが収まると、対策本部のある免震重要棟に移動した。しばらくして、電源が喪失して非常用発電機が回ったと報告があった。今まで外部電源が全部なくなることはなく大きな出来事だったが、電源が確保されていると、みんな比較的落ち着いていた。

——続いて津波がきた。

今度は、非常用の電源が落ちたという報告が次々上がってきた。なぜ止まったか最初は分からなかった。外にいた当直員がひしょぬれで戻ってきたという連絡があり、津波がきたんだと、しかも海拔10メートル。かなり大きい津波だと、そこで初めてわかった。

——全電源を失った。

驚きが非常に大きかった。非常用発電機が全部止まったこともさることながら、バッテリーも一部の原子炉で全部喪失した。中央制御室は真っ暗で機

——1号機の原子炉建屋で最初の水素爆発が起きた。

音は聞こえなかったが、振動はあった。余震の一つかと思ったが、けが人が出たという話もきた。なんで爆発したのかわからなかったのが驚いた。テレビの映像を見て、あせんとした。

——3号機では、代替注水ができる

ことを確かめてから、HPCIを止めるべきだったとの指摘がある。これも推測だが、圧力を下げるために開けるべき弁のランプ表示がついていて、ひねれば開けたらと考えたのでは。当直員が心配したのは、運転範囲を超えた状態で動かしているHPCIが壊れ、蒸気が噴き出したらとんでもないことになる。早く止めたいというところがあったと思う。細かいところまで指示を仰いでいたら事態が進展してしまつたので、当直の判断だ。

——複数の原子炉建屋が相次いで爆発し、事故の収束作業が困難になった。集中立地が影響したのでは。

1基しかない原発なら、対応は楽だった。3基同時に対応しないといけないのはかなり厳しかった。

——3号機の爆発は大きく、現場の放射線量はかなり上がった。それでも外に出て作業をしないわけにはいかない。全面マスクに防護服、その上にビニールの上着をかぶらないと汚染してしま

い、作業がしづらかった。

——格納容器の圧力を逃がすベントがうまくいかなかったのは。

建屋の中は照明が落ちていたので昼間でも暗い。ランプがついていないので、弁が開いたかの表示も見えない。細かい指示や調整がまったくできなかった。

——2号機はRCCIが3日近くもち、時間的な余裕があったのに深刻な状況に陥ってしまった。

現場の感覚は決してそうではない。その間に1、3号機の対応が入っている。3、4日目になると、みんなロボットではないので休まないといけない。

——2号機はベントも注水もできず、非常に緊迫した。

注水のための消防車の燃料が切れた時かベントができなかった時か、どちらがよく覚えていないが、かなり深刻で、吉田所長もぼうぜんとしていた。席から立って行ったり来たり。席は隣だったが、話しかけられる状態ではなかった。

——最悪の場合として、どうまじの

## 集中立地「3基同時の対応は厳しかった」 海水注入「しくじったら努力が水の泡に」

事態を考えたのか。仮に2号機でしくじって海水注入が遅れて、放射能の放出がものすごい量になると、1、3号機の海水注入もできなくなる。消防車にも油を入れられない。今までの努力が水の泡になる。それは強く感じた。

——その状況の中、4号機の建屋が爆発。福島第二原発に約600人が一時避難し、免震重要棟に約70人が残った。そのときの棟内の様子。

1、2、3号機とも曲がりなりにも消防車で海水注入を継続できる状態になつていて、別の大きな出来事もなかった。それまでがひどすぎたので、悲惨な状態というよりも、静かになつて落ち着いた感じだった。

——免震重要棟に残るメンバーを決めるのは、難しかったのでは。

誰を残して誰を退避させるのかは、十いくつある班の班長に一任していた。私自身は決断をする場面に追い込まれなかった。班長は苦労されたと思う。

——福島では、いまも多くの方が避難している。

申し訳ないの一言しかない。事故の影響が今も残っているのは、事故が続いていること。決して終わっていない。責任はしっかり果たして行く。事故前の備えは十分だったのか。

訓練一つとっても十分でなかった。外部電源だけでなく、非常用発電機が止まるシナリオもあったが、5時間半くらいは、なぜか修理できましたというシナリオだった。ある意味、脚本を読んだだけのお芝居に近い訓練をやっていた。

——事故の教訓は。

やはり安全の向上にはゴールがないところ。これ(このこと)を思った瞬間に、ひたひたにならぬ。人への想像力をかき立てて想定を考える。想定外は間違いないで起り得る。そのときに頼りになるのは、手順書とかマニュアルでなく、人の力。緊急の対応力も含めて、人を育てていくのが非常に重要だと思ふ。

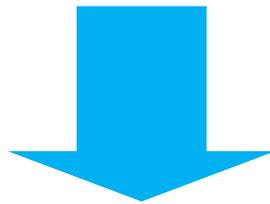


原発事故発生当時の状況を話す福良昌敏(ふくらのあきとし)元原子力・立地本部副本部長。東京都千代田区、池永牧子撮影。

## (2014年)

「現在のプルトニウム処理アプローチは、コストの上昇と財政難のために負担しきれないかもしれない(may be unaffordable)。」

米国 2014 年会計年度予算案「FY2014 BUDGET OF THE U.S. GOVERNMENT」  
p.90 から引用



## (2015年)

「オバマ政権は 2015 年度予算案編成の中で、建設中のMOX燃料製造施設(MFFF) および関連施設を“凍結状態(Cold Standby)” とし、他のプルトニウムオプションを検討するように要請した。」

「平成 26 年度発電用原子炉等利用環境調査報告書 (米国における原子力政策に関する動向調査)」  
から引用

ジョン・ホルドレン米大統領補佐官（科学技術担当）

「日本はすでに相当量のプルトニウム備蓄があり、これ以上増えないことが望ましい。」

「分離済みプルトニウムは核兵器に使うことができ、我々の基本的考え方は世界における再処理は多いよりは少ない方がよいというものだ。」

2015年10月12日『朝日新聞』

ジョセフ・ナイ氏等超党派 14名の学者・研究者が署名

「日本は六ヶ所の大型再処理工場の運転をまさに始めようとしています。米国のMOXプログラムを中止し、それにより、プルトニウムには経済的価値がないと明確に示すことは、運転開始の決定を延期するように日本を説得する上で、米国をずっと有利な立場に置くことになります。」

2015年9月8日 モニツ米エネルギー省長官への公開書簡